

農林水産政策研究所機関評価の結果
(平成18年度～平成20年度の総括評価)

社会的な貢献	
<p>(評価)</p> <p>a 評価 (2)</p> <p>b 評価 (3)</p> <p>c 評価 (1)</p>	<p>(評価に至った理由、改善すべき点等)</p> <p>〈a 評価〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 社会ニーズに沿った研究成果の対外発信が着実に増えている。特に、「世界食料需給見通し」や中国農業分析など話題性に富んだ報告がなされた点を評価したい。 ・ 国内稲作、畜産、林業、水産業など地味ではあるが国民の関心の高い研究テーマへの取り組みが待たれる。 ・ 学術研究誌への発表件数は増加し、改善された。20年度に「世界食料需給見通し」がヒットし、社会的貢献度を高め、評価できる。 <p>〈b 評価〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 研究成果等の情報発信について、かなり改善された点を高く評価する。メールマガジン登録者数も 6500名に達したが、伝達普及の徹底を図るための更なる工夫をお願いしたい。 ・ 現状維持にとどまらず、可能な改善策を確実にとり、前進が見られる。 ・ その時々、社会的関心の高いテーマについての広報などは高く評価できるが、日本農政がかかえる、より基本的な問題点などの研究成果の公表・広報に努めてもらいたい。 <p>〈c 評価〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 社会への発信の方法の改善の面により成果が得られている。発信されている研究テーマにやや偏りが認められる点は、さらに向上の余地がある。

a : 非常に高い b : 高い c : 普通 d : やや低い e : 低い

機関運営の状況	
(1) 課題設定及び研究実施等における行政部局との連携状況	
<p>(評価)</p> <p>a 評価 (3)</p> <p>b 評価 (2)</p> <p>c 評価 (1)</p>	<p>(評価に至った理由、改善すべき点等)</p> <p>〈a 評価〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 研究テーマの設定・実施・評価に関してPDCAサイクルを徹底し、その成果が着実に現れている。

	<ul style="list-style-type: none"> ・研究成果の活用状況のフォローは継続課題である。 ・3カ年を通じて連携のシステムと意識が定着したことを評価したい。 ・過去3カ年の連携への取り組みは高く評価できる。 <p>〈b 評価〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・行政部局との連携強化を高く評価する。成果のより一層の活用に結びつけるため、研究課題の設定に当って事前ヒアリングの強化も一策と考える。 ・研究のための研究機関ではないので、行政から信頼され、評価されるのが一番重要である。この点で3年間の歩みは堅実であった。これからは一層厳しくなる。 <p>〈c 評価〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・行政部局との連携は、行政サイドの評価によって大きく左右されるが、それが必ずしも高くないため。
<p>(2) 人材の養成・確保、流動性の促進への取組、外部の関係者等との連携状況</p>	
<p>(評価)</p> <p>a 評価 (1)</p> <p>b 評価 (5)</p>	<p>(評価に至った理由、改善すべき点等)</p> <p>〈a 評価〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・定員制約の下での機関としての対応は高く評価できる。 <p>〈b 評価〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・専門スタッフ職の政策研併任が増えたことは、高く評価できる。成果に結びつくことを期待する。 ・厳しい状況の中で健闘している。さまざまな手法(期限付き、民間との交流)を活用している。 ・専門性の高い分野や調査範囲の広い分野での外部研究者とのネットワーク構築に取り組んでいる。 ・複雑化する課題に対しては内部研究員の専門性の拡大や専門スタッフ職の活用が不可欠であろう。 ・テーマに即した機動的なスタイルがほぼ定着したことを評価したい。増加した調整役的なポストの運用や人材確保の長期的な方策に留意する必要がある。 ・新規採用もなく外部との連携・交流も限界がある中で、クローズアップ研究者の発掘など、人材育成に着実な改善がみられた。
<p>(3) 研究課題に応じた機動的・効果的な体制の確保</p>	
<p>(評価)</p> <p>a 評価 (3)</p> <p>b 評価 (2)</p> <p>c 評価 (1)</p>	<p>(評価に至った理由、改善すべき点等)</p> <p>〈a 評価〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・国家プロジェクトとして取り組む課題については、農水省と他省庁との連携が図られている。

	<ul style="list-style-type: none"> ・ 領域・チーム制がその機動性、効果を発揮しつつある。 ・ 領域・チーム制への移行と新体制の定着を評価したい。 ・ 研究課題の多様性といった事態への対応は、十分に評価できる。 <p>〈b 評価〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 国家プロジェクトについて、国際機関並びに他省庁との交流を促進したことを高く評価する。 ・ 効果を上げるための体制の工夫は着実に行われたが、個々の資金や人的資源の配分などは詳細な評価は限界がある。 <p>〈c 評価〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 目立った問題もないが、同時に目立った成果も特にないため。
--	-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

a : 非常に良い b : 良い c : おおむね妥当 d : やや悪い e : 悪い

総合評価

評価項目	評価結果
<p>(評価)</p> <p style="text-align: center;">B</p> <p>(A 評価(2)) (B 評価(4))</p>	<p>(コメント)</p> <p>〈A 評価〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 世界的な食料問題の顕在化もあり、「世界食料需給見通し」や「バイオ燃料」関連など、国民の関心の高い研究テーマをタイムリーに実施、広く公表した点について評価したい。これは今後も重要テーマであり続けることから、さらなる研究の掘り下げを期待したい。 ・ 国内農業問題への国民の関心将来の不安が高まっていることを考慮すると、稲作、畜産、林業、水産業などの現状分析に加え、方向性（理念と目標）の提示、そのための戦略・戦術など一歩踏み込んだ研究も必要ではないか。 ・ 行政目的と社会的ニーズの変化などに適切かつ効果的に3年間取り組んできたことは、大いに評価できる。 ・ 政権交代や世界市場の変化を前提とするとき、我が国や世界主要国の農業・農政が直面している問題についての基本的かつ長期的な諸問題について、研究所としての独自の研究活動の一層の組織化に期待したい。 <p>〈B 評価〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 地球温暖化が食料生産に及ぼす影響が懸念される中で、日本の政策は極めて重要な位置付けにあると言える。具体的には農業生産における生産性向上であり、食料自給

率の向上にも繋がる問題である。日本の先端植物技術は世界トップレベルにあり、実用化に向け、国民理解の促進を図りながら、政策を推進されることを大いに期待する。

- ・ 全体的に上向き、前進傾向が見られることを評価したい。情報発信力が著しく向上している。人材確保・開発に積極的に取り組んでいる。
- ・ 行政部局との連携については、テーマ設定等において十分な話し合いがされているか、途中経過の報告などで十分な意思の疎通があるか、今一度確認、検討する必要があるかもしれない。
- ・ 中山間地域における集落間連携など、客観的、科学的な政策の評価、分析を行い、その研究成果を何らかの形で世の中に示していく必要があるだろう。この場合、単なる省益の観点からでない、世間の納得が得られる研究成果を示せるかどうかである。
- ・ 行政対応の研究機関として、この部分の活動は、そのあり方も含めて議論する必要がある。今日はその入口に立っているだけである。
- ・ 総合評価に際しては、各年のフローとしての成果に関する評価をベースに置きながら、システムの改善や意識の向上といった点については、その成果が組織のストックとして継承されていく性格を有することから、3カ年を通じて到達した水準を考慮した。

〔総合評価基準〕

総合的な評価として、次の3段階で評価を行う。

- A 妥当
- B おおむね妥当
- C 問題が多く改善が必要